



会社概要

株式会社英田エンジニアリング
代表取締役 万殿 貴志
所在地 岡山県美作市三保原 678
資本金 6,000 万円 従業員 135 名
事業内容 冷間ロール成形機・造管機、無人駐車場・駐輪場管理システム、自動化専用機等の企画設計製造販売
URL http://www.aida-eng.co.jp/

1974 年創業の産業機械メーカー。ロール成形機、造管機、無人駐車場管理システム、パワーボラード、環境整備機器の設計・製造・販売を行い、研究と開発を重ねる。「常にちょっと進んだ」技術とサービスを提供するし、IT とコンピューターを活用した商品は、国内はもとより全世界でその技術とサービスは高い評価を受ける。

● 事業展開に至る経緯

(株) 英田エンジニアリングが無人駐車場に関する事業に参入したのは、1990 年代。大手不動産会社から無人駐車場管理システムの製造を請け負ったのがきっかけだった。無人駐車場というビジネスの初期の段階であり、当時は車の乗り上げ等で装置が破壊されるケースが多々あった中、当初は仕様に合わせて製造していたものに改良を提案していくうちに、設計から同社が担うようになり更に改良を重ねていった。その後、新製品を開発する上で、駐車場の運営ノウハウが必要と判断し、独自ブランドで無人駐車場を運営することとなり、装置、システム、経営面も含めて様々なノウハウを蓄積していった。

当初、駐車場でトラブルが発生すると、メンテナンス員が現場に駆けつけるという体制であったが、これでは事後の対応で駐車場の営業停止が発生してしまうことから、コインパーキングに IoT を活用した駐車場遠隔管理システム「i park'n コンシェル」を開発、商品化した。

● IoT を使ってモノからコトへ

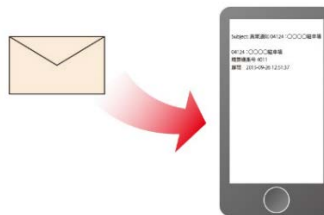
精算機の領収書用のロール紙切れ・釣銭切れ、不正出庫等が発生した場合に自動で同社のメンテナンス員に異常通知メールが届くために、メンテナンスの事前対応、トラブル発生時の迅速な対応を実現した。

駐車場内における駐車区画の利用頻度や、近隣の競合駐車場の状況を考慮した最適な価格設定を行うといったきめ細かなサービスの展開が可能となっている。駐車場精算機からクラウドに集積されるデータが迅速に分析され、車室別の利用率や時間帯別利用率が容易に把握できることにより、利用率が悪化している要因を特定・分析し利用率の改善を図ることが素早くできるようになった。また、駐車場全体をデザインする「P-ETA®」システムを開発した。

ビジネスイメージ



売上・入庫情報をビッグデータとして扱うことが可能なデータベースにより、売上推移等の分析を簡単に確認することができる。WEBソフトのため、状況・売上をリアルタイムに確認することができる。



トラブルを感知しメンテナンスメールが届く



● ユーザーとの価値づくりのポイント

同社の無人駐車場事業には、①土地所有者が自ら駐車場を経営する（同社は機械装置を販売）、②機械装置の販売とメンテナンスを受託する、③同社が土地を賃借し自社ブランドで駐車場経営を行う、④同社と土地所有者で共同経営を行う、といった事業パターンがある。

駐車場の遠隔管理システムを導入することにより、1日ごと、車室ごとの損益分岐点の達成状況を把握し、収益向上のための対策を講じている。また、深夜のトラブル対応など、長年にわたって当社が蓄積したデータとこれを活用するノウハウにより、事業としては土地ごと同社に任せるオーナーが大部分である。

最近の取り組みとして、人工知能AIを導入した売上高予測システムの開発に取り組むなど、無人駐車場の経営をトータルでサポートし、駐車場オーナーとのWIN-WINの関係を構築している。

知財戦略

知的財産管理課を設置し、特許の取得・管理に積極的に取り組んでいる。

無人駐車場事業においても、車止め装置、精算機等に特許を取得しており、改良改善した段階で基本的に出願する方針としている。自社で無人駐車場を経営することで、顧客たる駐車場経営者に有益な情報を提供することが可能となっているとともに、IoTで得られたデータが自社の駐車場機器の開発に活用されており、知財の好循環を生み出している。

● サービス・ドミナント・ロジックの視点

- 同社は、優れた駐車場遠隔管理システムを通じて、駐車場経営者との間に良好な関係を構築している。従って、管理システムのさらなる高度化が、当社にとっての当面の技術的課題である。
- しかし、サービス・ドミナント・ロジックからすれば、いまひとつ重要となってくるのは、同社が駐車場の利用者との間に直接的な関係を構築することにある。そして、その仕組みによる利用者との直接的なつながりをもとに、彼らと価値共創を如何にして行うかにある。
- 言い換えれば、クルマの所有者、使用者の生活世界に入り込み、クルマによる移動という行動プロセスの中に駐車場及びその利用を位置づけ、そこから生まれる新たな価値を彼らと共創することが重要となっている。即ち、駐車場への誘導を通じて、クルマが果たす快適な移動という価値を利用者と共創していくことが必要といえる。